

委員会報告

表紙写真の選考を終えて

学会誌企画・編集委員会

学会誌第91巻の表紙写真を募集(テーマ:農業(水利)施設・構造物とそれらに支えられた農地・地域の景観など:現代の最新技術と苦労が垣間見える造形美・用の美など,2022年9月30日締切)したところ,19点の応募がありました。10月28日に審査委員会(委員長・柳本尚規東京造形大学名誉教授)を開催し,12点を選定したので,ここに報告します。

学会誌企画・編集委員会では,学会誌第92巻(2024年発行)も皆さまからの応募写真で表紙を飾ることとし,表紙写真を募集しています。

募集の趣旨および応募方法の詳細は,本誌65ページをご覧ください。たくさんのご応募をお待ちしております。

講評

柳本 尚規(東京造形大学名誉教授)

ドローンカメラが飛んでいる写真を見ていて,そのカメラにかつてなじんだロゴマークがついているのを見つけてびっくりした。すでに消え去ったカメラのマークがこんなところで生きのびている,という驚きである。

カメラのイメージはずいぶん変わったのではないだろうか。同時に写真のイメージもずいぶん変わってきたのではないだろうか。そういう変化を追いかけてこなかったのが詳しくは分からないが,ドローンカメラで撮ったような映像がじつに多く溢れている。何がとって広告写真,コマーシャル映像のたぐいのドローンイメージの氾濫はすごい。

ドローンのイメージはみな鳥の目のイメージである。鳥瞰図だ。この視線,視野は広くて客観的,無党派的でクセがない。人間が体験できない視点だから憧

れもある。ふり返れば,人間の視線を体現してきたままでの写真や映像が詭^{なま}っていたり汗臭いもののようにも思えてくる。

鳥瞰図に対しては虫瞰図という言葉がある。辞書にはない変な言葉だが,虫の目で見るという意味になる。鳥瞰図的の見方が大所高所の見方から小異に無頓着^ほという方へ傾きすぎたとき,そのアラームとして地を這う虫の目が必要とされるようになって使われる。

広告写真やテレビコマーシャルを見ていてまた虫の目の気分がもたげてきた。

これはドローンのイメージにやや食傷気味,というか虫の目はどうしたか,というどこかからの警告かもしれない。

応募表紙を見ていても虫の目のことがちらついた。いまここにしかない,一瞬の息吹も大切なものだと探してほしいとあらためて思った。小さなものを探して登録するのが写真の真髓^{ずい}だと教えられてきた,古い映像観かもしれないけれど。

第91巻表紙写真入選作品

1号



次代に向けた急傾斜柑橋園の圃場整備
(近田昌樹)

西日本豪雨で愛媛県宇和島の果樹園地が受けた被害は大きかった。地形を活用した柑橋栽培だから、地形そのものを崩されて園地も一緒に消えてしまった。

写真はその災害復旧工事だ。従来のような被災園地だけの復旧ではなく、被災していない園地も取り込み区画整理し直すという新しい計画だ。

斜面にテープを巻いたようなめずらしい光景は、原形を復旧するばかりではなく山全体を一体的に整備するその計画のしるしのように見える。

白いテープのように見えるところは、これまでになかった新設の農道だ。これを園地すべてに接続してゆく。さらに耕作道も農道に接続して生産性を上げる。元に戻すだけでなくこれを機会に合理的な園地をという意志が、この白いところで強調されているようだ。

それが作者には地上絵のようにも見えるのかもしれない。

2号



大地を守る（佐賀県七浦地区
フラッシュ対策施設）（渡邊圭四郎）

干潟は、河川や沿岸流に運ばれてきた土砂が積もって成長する。潮位差が小さい日本海側や北海道沿岸ではあまり発達しない。干潟のほとんどは潮位差の大きい本州の太平洋沿岸や四国、九州に分布している。

七浦干拓地もそういう干潟に由来する。干潟が発達してみお筋が狭まり後背農地の排水に障害が起きた。だから排水を貯めて樋門から一気にみお筋に流すという対策をとってきた。しかし、本地区の樋門からの排水量は少ないため、みお筋の維持が難しい状況だった。写真のフラッシュ対策施設は満潮時に海外に建設したプールに海水を貯めて、干潮時に一気に排水し、みお筋の維持を行っている。

写真からは、干拓によってできた農地と浅場の干潟の関係がよく分かる。堆積した砂泥に光が当たり、独特な生態系が生まれる循環性も見せ、干拓は天然の豊かな地層を再発見する機会だと言わなければならない。

農地のみずみずしさを見せながら自然作用への対策法を取めたこの写真を見ていると、鷹揚なようにも見えるがしかし緻密なシステムを持つ自然の姿が、ひしひしと伝わってくる。

3号



千年前の面影を残す田園風景
(世界農業遺産の郷 田染荘)
(渡邊圭四郎)

平安時代に形成された風景だ。

「田染荘小崎(たしぶのしょうおさき)の農村景観」として国の重要文化的景観に認定されている。「クスギ林とため池がつなぐ国東半島・宇佐の農林水産循環」として世界農業遺産にも。

このあたりは降水量が少ない。だから小さなため池を点在させて、安定的な農業用水を確保してきた。ため池の周りにはクスギ林を育てて水を守り、さらにクスギ林では原木椎茸栽培もおこして里山の保全につなげてきた。ぐるぐる回る関係だ。

生活生業のかたちをそこに映し出しているものを原風景というすれば、このぐるぐるの関係の姿こそが、原風景の原理なのではないか。

クスギ林やため池、堰、水路の風景が生活の道具だった。つまり生業の道具だった。だからそれらの姿を通して、いまに続く生業の内容と文化の連続性を私たちは理解する。

写真の、この連続性を味わっているかのような感じに共感がわいてくる。

4号



大地を繋ぐ
(国営諫早湾干拓事業潮受堤防)
(渡邊圭四郎)

有明海のあたりでは海に流し出されてたまった砂や泥を濁の土、ガタ土と呼ぶ。ガタ土は干満の大きなところにたまる。

太平洋側の満潮と干潮の差が日本海側と比べると大きいのは、太平洋は出入り口のない開けた海であるのに対して、日本海には海峡も多く干満時の海水の移動が滞るからだと言われている。

濁が発達すると浅瀬を仕切って水を抜き取る。そして干上がらせて農地してきた。しかしガタ土はその先にすぐたまるのでまた抜き取りだ。そして干拓、の繰り返し。これを600年以上にわたって繰り返してきたが、農地の多くは海水面より下なので高潮や洪水被害が頻発する。これを克服するのが諫早湾干拓事業のテーマだったろう。

海に線を引いたように見える。地図に記された記号のようだ。自然と人間の営みの交わり合うところを示す記号のようだ。記号は標で記念碑でもある。写真がそう言っているように見えた。

5号



景観に溶け込む兩岸分水工と
左岸連絡水路橋（藤井 修）

標高差3,000mを流れ下る常願寺川は、河口の富山湾までがわずか50数km。急流河川ゆえに洪水氾濫が多発した。対策に当たったお雇い外国人技師が「この川は滝だ」と言ったと伝えられる有名な川だ。

対策は、農業用取水の統合による扇頂部での合口取水、新川掘削による河口分離、大幅な引堤等と併せて、川をはさんだ常東地域(立山町)と常西地域(富山市)に広がる農地への水路をつくることだった。

写真の連絡水路橋は、右岸側にある分水工の水を左岸側に送水する施設だ。改築に当たっても昔の旧水路橋のかたちを継承してつくられた。

人々は美しいアーチ型の水路橋を仰ぎ見てどんなに頼もしかったことだろうか。

写真はその様子を一望するし、流域の地勢も見はるかす。造形性を強調した写真だが、そうすることによってその造形に託した気運が強調されたかもしれない。そこに潜んだ人心地、幾多の時代の人々の水路橋に寄せた思いが彷彿としてくる写真になっている。

6号



北淡路先端ファーム—農業参入企業誘致
を目指して—（合田 弘）

水利施設も整った農地が広がる淡路島北部の中山間地域は、高度経済成長期の1970年代に国営事業で整備された。だが年月を経て高齢化や後継者不足で、農地のおよそ3割が耕作放棄地になった。この事情を受けて策定されたのが北淡路地区の営農ビジョンだ。すでに一般法人の参入も受けるなど新たな担い手を取り込んだ活動が展開されている。写真のオリブ畑もその情勢の一つ。

オリブの木は日光を好み湿度と強い風を嫌う。日本に特有な梅雨や秋の長雨、酷暑、台風は苦手だ。しかし瀬戸内の気候は大丈夫らしい。興味深いのはそこでどう育つかということと同時にどう文化が生み出されてゆくのだろうかということにもある。

栽培の盛んな地中海では、オリブの生命力が畏敬の念を生んで宗教とも結びついたといわれるほど、その風土の源になった。だから新たに瀬戸内地方に広まるこのオリブの風景、一見地中海かと思える瀬戸内の新しい風景がどんなイメージに成長するだろうかという関心がわいてくるのだ。

移植されたイメージがどのように根付くか、楽しみにする白地図のような写真だ。

7号



平成30年7月西日本豪雨災害からの創造的復興に向けて（愛媛県）

2018年7月の西日本豪雨災害では宇和島市吉田町の多くのみかん園が被害を受けたが復旧をはかっている。一帯は山全体に広がる、ミカンをはじめボンカン、デコボン、ブラッドオレンジなど柑橘類栽培の果樹園地だ。この地区でも多くの園地が崩壊した。柑橘類の栽培には、陽射しのほかに水はけがよい急峻な斜面が適地。水はけがよい急斜面は樹木に水分ストレスをかけ糖度を増す。しかしその条件が防災面では不利になることもある。だから急な斜面を緩やかにし農道や水路を整備する復旧工事は、山の形を変えるほどの大きな事業となっている。

鳥瞰図さながらの写真でこの地域の園地環境がよく分かる。おもしろいのは、この写真のような全体をとらえた写真が、反対に細かなものの存在を知りたくさせることだ。一方の傾向が強まるともう一方の側はどうかという関心がわいてくるように、ここでも山の中の小さな生きものの存在に気が向いてくる。

10号



島嶼の山里海（安西俊彦）

野底岳（のそこだけ）は石垣島の北部にある山で島では2番目に高い山。山に伝わる恋人伝説に登場するマーベという女性にちなみ、野底マーベの別称が定着している観光名所だ。山頂からは360°のパノラマビューを楽しめるという。

写真は、島の西側、東シナ海の方角を望んでいるが、眼下には野底地区の街並み、集落、耕作地、そして海が見渡せる。

県内では稲作の主要な産地だ。二期作が行われ、一期作は6月にも超早場米として出荷される。自然の壮大さを捉えきれないカメラの視野がもどかしげな写真だ。しかし樹林地に映った雲の影を見ていると、地域の自然の循環性に対する関心ももたげてくる。1枚の写真に写り込んだ風や空気感も見えるようでだんだん心地よくなっていく。

8号



歴史的風土特別保存地区での都市近郊農業（脇谷芳招）

高度経済成長の時代、都市近郊は無秩序な開発や利用がいきに進んだ。＜古都＞の場合はとりわけその深刻度が目立った。その対策として制定されたのが「古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法」、いわゆる「古都保存法」（1966年）だ。

古都とはかつて政治や文化の中心地として重要な地位にあった町村と定義され、京都市、奈良市、鎌倉市、天理市、橿原市、桜井市、奈良県生駒郡斑鳩町、同県高市郡明日香村、逗子市そして大津市と、8市1町1村が指定された。ここでは「古都における歴史的風土」を、遺構や建築、自然環境や生活が一体となった土地の状況、のこととしている。

写真の舞台である嵯峨釣殿町の地域は京都の中心部に近い。野菜の露地栽培の味覚も失われることなく循環するような環境だ。

写真は何かを強調しているわけではない。私もとくに何かを見つけるわけではない。とくに何も無い、という日常が素晴らしいという感覚を味わうばかりだ。写真の風景がバランスよく見えているからだろう。

11号



水を湛える余呉湖（北川 孝）

余呉湖は琵琶湖とともに稲作農業が発達した湖北地域へ用水を供給してきた湖だ。琵琶湖より高いところに位置するから、揚水施設でポンプアップして余呉湖へ導水することで水利を確保している。

写真は賤ヶ岳（しずがたけ）山頂からのシーンだろう。織田信長の後継をめぐる、織田勢力を二分する豊臣秀吉と柴田勝家の賤ヶ岳の戦いがあった場所だ。

湖にしては小ぶりな部類である。写真左岸に余呉の町並みがうっすらと見える。右上に見えるのは余呉湖への導水路だ。琵琶湖からの導水は写真下方からになる。

川の流れがせき止められて生まれた自然湖である余呉湖は静かだ。もともと流入する川も流出する川もないので鏡湖（きょうこ）と呼ばれた時代もあったそうだ。その神秘性が世界の各地にある羽衣伝説の日本版として、「近江国風土記」の余呉湖のところに登場する。

写真はそういう歴史物語の目次になっているような感じだ。

9号



栗巣川のタルマル魚道（乃田啓吾）

栗巣（くりす）川は世界農業遺産「清流長良川の鮎」の重要な要素だ。川に生きる魚種への配慮も進んでいる。魚道の整備もその一つ。

写真は1カ所に4つのタイプを備えた魚道を写している。

壁の際に水たまり場ができるようになっていたり、漕上しやすいうように扇型に配置されていたりして、魚の生活を想像してつくられた魚道装置は見ていて楽しい。

魚にも一生の間に上流と下流を大きく行き来する種もあれば小さな生活圏の種もあるそうだが、川はそうしたさまざまな魚にとっての環境を保ってやらなければならない。高速道だけがあればよい、というものではないようにである。

魚道は、多様な人々が共生する社会の営みを流域の中に置き換えてみてできた形だといえる。

広い風景の中の一点でしかない魚道だが、この魚道の写真を見ているとここからもう一つの広い風景が繰り広がってゆく。

12号



冬作に備える佐古ダム（近田昌樹）

佐古ダムは愛媛県「道後道後平野農業水利事業」によって造られたダム。雨が少なく有力な河川に恵まれないところへの水利を図る。面河（おもご）ダムの水利権がない冬季の道後平野へ灌漑用水を供給する。冬季、農業用水の専門に特化したダムだ。

道後平野では水田の裏作がある。伝統の麦作に加えてタマネギなどの野菜栽培も盛んだ。佐古ダムの用水は秋10月7日から春6月5日まで利用される。したがって原則として使用開始日には満水を湛えてスタートする。

写真はその直前の様子だろう。大雨が降ればダムの貯水量が一定量を超え、堤体上部の洪水吐を乗り越えて排水される。写真の洪水吐の向こう下にはジャンプ台のアプローチのような導水路が急勾配で見えるはずだ。

待機するダムの表情が人間らしい。スタートの号砲を待つ緊張感も漂っていて私も少し緊張した思いになる。